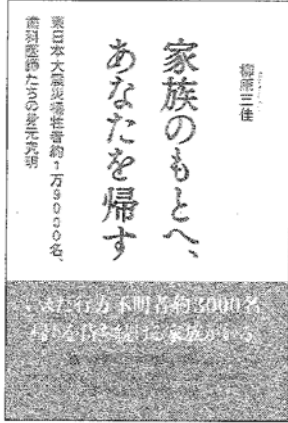


新刊紹介

『家族のもとへ、あなたを帰す』

柳原 三佳著(WAVE出版)

「遺体番号ウ439とラツミヒサコ様は、同一人物と断定される。」。衝撃的なテロロ



東日本大震災 身元究明に挑んだ歯科医たち

東日本大震災で収容された身元の分らない遺体。そこには名前がない。津波による損傷がひどく、家族でさえ判断がつかないケースもまれではない。著者の柳原三佳さんはこれまで、交通事故

問題や死因・身元究明問題などで鋭い切り口のルポを執筆してきたノンフィクション作家。過去、多額の死亡保険金を掛けた替え玉殺人による保険金詐欺事件などもルポしてきた。東日本大震災のような遺体の数が膨大な大災害では、「歯」が身元確認の重要な決め手となる。歯は硬く、腐乱しても焼けても長く残るからだ。被災地の歯科医師たちは、震災後すぐに対応に走った。遺体安置所に向き、日々、搬送される遺体から一本ずつ歯科所見(デンタルチャート)を取る。しかし、死後硬直した遺体は、開口するまでに多くの時間を要する。特殊な器具を口に差し込み、テコの要領で少しずつ隙間を開いていかなければ所見は取れない。

さらに、時間が経過して腐乱した遺体は口を開けるだけでも損傷しかねない状況だった。こうして採取した歯科初見と生前のカルテを一人一人照合して身元を究明した。歯科医師の一人はこう語る。「遺体の冷たさは、独特のように思います。芯から冷え切ってしまった遺体の口腔内に触れていると、指先から冷たさが伝わり、作業する手がかじかんできます」と。歯科医師たちの証言の数々は本書に委ねるが、電気も満足な機器もない中、現場での過酷な作業は果てしなく続いた。運ばれてきた遺体の中には、幼い子どももいた。そうした中で歯科医師たちの心の葛藤は想像に絶する。

- 【主な内容】
- 第1章：遺体の「歯」が語るもの
 - 第2章：凍りついた口を開いて
 - 第3章：泥まみれのカルテ
 - 第4章：名前を取り戻した遺体
 - 第5章：「原発下」という戦場で
 - 第6章：遠く離れた場所でも闘うものたち
 - 第7章「使命」と「責任」の原点
- (四六判224頁、定価1600円+税)